

日本語談話における終助詞の意味論*

7B-2

小野晋

森辰則

中川裕志

横浜国立大学 工学部

1 はじめに

日本語の談話において終助詞の果たす役割は非常に重要である[3][4]。本稿では、「(主観述語)+よ/ね/よね」を述部として持つ文の直観的な読みを導くプロセスのモデルを明らかにすることを目的とする¹。そして、主観述語との結合を踏まえた上での終助詞「よ」「ね」「よね」の意味論を提案する。

2 「知っている」と「信じている」

Xを認知的主体とする。「XがYを信じている」とは、(他の人がそう思っていない)XがYを正しいと思うことである。客観性や他人をそう信じさせられるほどの証拠を必要とはしない。形式的には、「信じている」については、例えば[1]にある定義を仮定する。

一方、「XがYを知っている」については認知主体としての「知っている」の意味合いだから、「信じている」に加えて以下のいずれかが成立する、と定義する。

- XがYを直接経験している
- Xが、直接経験によって得た情報と、一般的に通用している—例えば科学的に立証された—知識および推論によって、Yを導ける

特に二つ目の場合、同じ直接体験をした全ての人が導きだし得ると、Xは思っていなければならない。

3 「意識している」こと

例えば、殆どの人は、普段、自分を名前を意識することが無いように、情報には意識しているものと、そうでないものがある。本稿では、認知主体の記憶を以下のようにモデル化し、「意識」を以下のように、定義する。

認知主体は、自分にとっての、全ての「知っている」と「信じている」ことを知識ベースとして持っていて、談話を行なう時には、これらのうち談話に必要なものを、知識ベースより早くアクセスできるあるバッファに一時的に蓄えて、それを利用して談話を行なう、というモデルを想定する。このバッファに蓄えられている情報を「意識している情報」とし、このバッファを「意識バッファ」と呼ぶことにする。Xを認知主体とすると、「XがYを意識している」とは、Xの意識バッファにYが存在している状態、と定義する。

4 「淋しい」+「よ」「ね」「よね」

主観述語には、その状態の経験者にしか分からない主観的状态を表す場合と、感情的品定め表現[5]となる場合とがある²。以下、主観述語を述部に持つ文で、主観述語が、前者の用法で使われることを「主観記述」と呼び、後者の用法で使われることを「客観記述」と呼ぶことにする。また、ある発話文を聴者が聞いた時、聴者が

そこから得られる情報を、その文の「読み」と呼ぶことにする³。

「(主観述語)+よ/ね/よね」を述部とする文の例として、「淋しいね/よ/よね」の読みを考えてみる。

(1) 淋しいよ。

文(1)の主観記述の読みは、(1-a)かつ(1-b)または、(1-a)かつ(1-c)のいずれかとなる。

- (1-a) 話者は淋しいと感じている
- (1-b) 話者は、「聴者は、『話者が淋しいと感じている』ことを知らない」と信じている
- (1-c) 話者は、「聴者は、『話者が淋しいと感じていること』を意識していない」と信じている

そして、文(1)の客観記述の読みは、例えば、文(1)を「あの街は淋しいよ」の主題「あの街は」が省略された文とすると、(1-x)かつ(1-y)または、(1-x)かつ(1-z)のいずれかとなる。

- (1-x) 話者は、「(あの街は)淋しい」を知っている
- (1-y) 話者は、「聴者は『(あの街は)淋しい』ということ知らない」と信じている
- (1-z) 話者は、「聴者は『(あの街は)淋しい』ということ意識していない」と信じている

(2) 淋しいね。

文(2)の主観記述の読みは、以下の(2-a)かつ(2-b)または、(2-a)かつ(2-c)かつ(2-d)のいずれかとなる。

- (2-a) 話者は淋しいと感じている
- (2-b) 話者は「聴者は『話者が淋しいと感じている』ことに同意する」と信じている
- (2-c) 話者は「聴者は淋しいと感じている」と信じている
- (2-d) 話者は「聴者は『聴者が淋しいと感じている』ことに同意する」と信じている

そして、客観記述の場合は、(2-x)かつ(2-y)となる。

- (2-x) 話者は、「(~は)淋しい」を信じている
- (2-y) 話者は、「聴者は、『(~は)淋しい』ということに同意する」と信じている

(3) 淋しいよね。

*Semantics of Japanese Sentence Final Particles in Discourse
Susumu ONO, Tatsunori Mori and Hiroshi NAKAGAWA
Faculty of Engineering, Yokohama National University

²本稿では、「よね」は「よ」と「ね」が繋がったものではなく、独立した語彙とみなす。

²「欲しい」、「憎い」、「好きだ」など感情的品定め表現とならない主観述語もある。

³この情報を使って、聴者は会話の含意などの推論を行なう。「お前は学生だよ」という発話の、学生としての自覚を促すような効果は、会話の含意として得ることができるが、ここではその詳細は省略する。

文(3)の主観記述の読みは、以下の、(3-a),(3-b)かつ(3-c)となる。

- (3-a) 話者は、「聴者が淋しい」ことを意識している
- (3-b) 話者は、「聴者は、『聴者が淋しい』ことを意識していない」と信じている
- (3-c) 話者は、「聴者は、『聴者が淋しい』ことを肯定する」と信じている
- そして、客観記述の場合は(3-x),(3-y)かつ(3-z)となる。
- (3-x) 話者は、「(~は)淋しい」ことを意識している
- (3-y) 話者は、「聴者は、『(~は)淋しい』ことを意識していない」と信じている
- (3-z) 話者は、「聴者は、『(~は)淋しい』ことを肯定する」と信じている

5 「淋しいよ/ね/よね」の読みを導く方法

5.1 「淋しいよ」の読みを導く方法

終助詞「よ」について、以下の制約を提案する。

終助詞「よ」の制約 終助詞「よ」の従要素を \emptyset とすると、以下の1,2.の両方が満たされる。

1. 話者は \emptyset を知っている
2. 話者は以下の(a),(b)のいずれかを信じている
 - (a) 聴者は \emptyset を知らない
 - (b) 聴者は \emptyset を意識していない

5.1.1 主観記述の文の場合

「淋しい」の経験者を話者以外の人とすると、話者は、話者以外の人「淋しい」と感じていることを知ることはできないので、制約の1.が満たされない。よって、「淋しい」の経験者を話者以外にはできない。「淋しい」の経験者を話者とする、終助詞「よ」の制約に違反しない。そして、この制約の1.,2a.,2b.より、それぞれ、文(1)の主観記述の読みの(1-a),(1-b),(1-c)を導くことができる。

5.1.2 客観記述の文の場合

経験者は「一般に誰にとっても」ということになり、これで、終助詞「よ」の制約に違反しない。そして、この制約の1.,2a.,2b.より、文(1)の客観記述の読みの(1-x),(1-y),(1-z)を導くことができる。

5.2 「淋しいね」の読み

終助詞「ね」について、以下の制約を提案する。

終助詞「ね」の制約 終助詞「ね」の従要素を \emptyset とすると、以下の1.,2.の両方が満たされる。

1. 話者は、 \emptyset を信じている
2. 話者は、「聴者は \emptyset に同意する」と信じている

5.2.1 主観記述の文の場合

主観述語の性質により、「淋しい」の経験者を第三者には出来ない。

「淋しい」の経験者を話者とする、終助詞「ね」の制約に違反しない。また、この制約の1.,2.より、それぞれ、文(2)の主観記述の読みの(2-a),(2-b)を導くことができる。

「淋しい」の経験者を聴者としても、終助詞「ね」の制約に違反しない。また、この制約の1.,2.より、それぞれ、文(2)の主観記述の読みの(2-c),(2-d)を導くことができる。ところで、主観述語について、以下のような制約を提案する。

主観述語の同意要求の制約 「発話時に、聴者が(主観述語)」ということについて、話者が聴者に同意を求めるためには、「発話時に、話者が(主観述語)」ということを経験していなければならない。

「淋しい」は主観述語なので、この制約により、文(2)の主観記述の読みの(2-a)を導くことができる。

5.2.2 客観記述の文の場合

「淋しいよ」の場合と同様に、終助詞「ね」の制約の1,2.より、それぞれ、文(2)の主観記述の読みの(2-x),(2-y)を導くことができる。

5.3 「淋しいよね」の読み

終助詞「よね」について、以下の制約を提案する。

終助詞「よね」の制約 終助詞「よね」の従要素を \emptyset とすると、以下の1.,2.,3が全て満たされる。

1. 話者は、 \emptyset を意識している
2. 話者は、「聴者は \emptyset を意識していない」と信じている
3. 話者は、「聴者は \emptyset を肯定する」と信じている

5.3.1 主観記述の文の場合の場合

主観述語の性質により、「淋しい」の経験者を第三者には出来ない。「淋しい」の経験者を話者とする、聴者は、「話者が淋しい」ことを肯定することはできないので、終助詞「よね」の制約の3.を満たすことができない。よって、「淋しい」の経験者は話者にはならない。

「淋しい」の経験者を聴者にする、終助詞「よね」の制約に違反しない⁴。また、この制約の1.,2.,3.より、それぞれ、文(3)の主観記述の読みの(3-a),(3-b),(3-c)を導くことができる。

5.3.2 客観記述の文の場合

「淋しいよ/ね」の場合と同様に、また、終助詞「よね」の制約の1.,2.,3.より、(3-x),(3-y),(3-z)の読みを導くことができる。

6 おわりに

以上、「淋しい」という主観述語と終助詞「よ」「ね」「よね」が隣接した文で直観的読みの生じるプロセスのモデルを説明してきた。このモデルは、他の主観述語についても適用できる。このモデルを計算可能なものに形式化すること、および主観述語以外の述語についての検討などを行なう予定である。

参考文献

- [1] 片桐恭弘:「文脈理解のモデル」, 情報処理 Vol.30, No.10, pp.1199-1206(1989)
- [2] 大江三郎:「日英語の比較研究」, 南雲堂(1975)
- [3] 川森雅仁:「終助詞と認知様相」, 自然言語処理研究会報告 84-6, 1991
- [4] 土屋俊, 白井賢一郎, 鈴木浩之, 川森雅仁:「日本語の意味論を求めて6」, 言語, 大修館(1990)
- [5] 寺村秀夫:「日本語のシンタクスと意味I」, くろしお出版(1982)

⁴ 「淋しいよね」と違い、「痛いよね」の場合、聴者が、「聴者自身が痛いかどうか」を意識している筈なので、終助詞「よね」の制約の2.を満たすことができない。「痛い」「眠い」「痒い」等の述語に「よね」の付加した文は、客観記述にしかならない。